

各地で研修会が盛況

第38回 全国ハイグリーン研修会 開催

8月20～21日、ホテル東京ガーデンパレスにおいてエムシー・ファーターイコム(株) アミノ・ミネラルグループ主催の全国ハイグリーン研修会が開催された。北海道から熊本県まで全国25社のハイグリーンを取り扱う特約店が参加、当社・メーカー関係者合わせて総勢66名となり大変盛況となった。本会でのトピックスを提供したい。第1日目の講演では東京農業大学名誉教授後藤逸男先生より、土壌診断から見直す「土づくり」の講演があった。後藤先生は現場に密着した40年以上の研究より「健康な土づくり」の基本として土と肥料の化学が不可欠である



こと、健康な土として三位一体の土づくり{物理性：団粒化による「水はけ」「水持ち」の改善 化学性：土の体力（土力）を下げない施肥管理（可給態リン酸過剰・土壌酸性化の回避）生物性：腐植を減らさないための有機物適正補給（土壌微生物多様化のための団粒化促進、メタボ土壤には「緑肥」が最善}が必要と事例を挙げて紹介された。事例として土壌の種類によってもレタス根腐れ病の発生状況が違ふこと、また、過給態リン酸過剰土壌においてはネコブ病の発生を助長すること、土壌pHが低い程ホモプシス根腐れ病が発生しやすいこと、砂丘地帯の畑ではpHが低い土壌が目立ってきており硫黄やホウ素欠乏が見られるようになってきていると紹介があった。興味深い事として、世界一肥沃なロシアのチェルノーゼムは日本の黒ボク土と比較すると交換性カルシウムが高くpHも高いが微量元素含有量も高いということが紹介された。また、この機会に改めて土壌診断に基づいた施肥管理の徹底が重要であると強調された。更に消費者の化学肥料に対する正しい認識も必要であると説かれた。

2日目には体験発表として、豊田肥料株式会社の伊藤信介様よりハイグリーンの拡販方法について発表がなされた。方法として販売地域の農業情勢の変化を分析、新たな販売ターゲットの選定を行いデータの蓄積と同時に販売活動を行ったとされた。例として小麦に向けたハイグリーンの拡販を实践されており、地元での農業再生協議会への働きかけにより土壌改良資材が助成の対象となったため拡販に結びついたと紹介があった。

講演として日本食品分析センターの齋藤紀子様より生鮮食品の栄養・機能性の表示について情報提供がなされた。トピックスとして、4月に改定された食品表示法では一般用として加工食品と添加物においては栄養成分表示が義務化され、新たに生鮮食品については任意条件となったこと（業務用は全て任意）が報告された。（経過措置期間あり）また、栄養成分表示の改定ポイントとしては今までナトリウム表示されていたものが食品単位当たりの「食塩相当量」として表示が義務化する事となった点が紹介された。

野菜や果物の強調表示する例としてまずは記載根拠となる分析資料のデータ保管が必要で表記するには誤差範囲内に納まること条件となっており注意が必要である。この改定法を作成するにあたって農林水産技術会議において生鮮食品の機能性表示においては栽培時期、栽培管理状況、品種におい

(次ページへ続く)

(前ページより続く)

て数値が変動しやすいため機能性表示の例としてサンプリング方法が議論されたようだ。産地での出荷量が多い品目においては収穫時期の開始・中間・終了時期に5生産農家が2検体検査を行うことが望ましい(合計30回もの成分分析値が必要)との見解がなされており経費的にも掛かる状況となっている。また、リコピン等「食品表示基準」にない成分についても表示は可能だが、食品の成分の表示が実際の成分の含有量と著しく異なる場合には「優良誤認表示」に該当する恐れがあるためにこれもまた注意が必要との事。さらに表示されている値が定められた分析方法によって得られた値とは一致しない場合があることを示す「推定値」や「この表示値は目安です」等の追記が必要との事。機能性表示を検討されている方は参考にされたい。

メーカーの技術情報として最近の気象変動とハイグリーンの成分の働きとして中村グループ長代理より拡販に向けた提案がなされた。いずれもタイムリーで充実した中身のある内容であった。今後の当会の益々の発展を祈念したい。

東北トモエ営農現地研修会開催 in 山形

8月4～5日、山形県において第41回東北トモエ営農現地研修会が開催され、東北地区のトモエ肥料特約店11社20名の参加を得て盛況に行われた。

現地では水稲でのダイヤロングの圃場とスイカの肥実効の使用圃場を視察し、室内研修ではバイオフミン、新商品のダイヤロング・ロングリリーフの商品説明が行われた。最初に山形県村山市に移動して「はえぬき」圃場を訪問してダイヤロング試験区を視察。ダイヤロングは緩効性窒素成分を豊富に含み、緩効度が40%～60%と高く、高温による生育後半の肥効落ちや農家の高齢化に伴う体力低下に適応した肥料だ。また、ノンコーティングの為、圃場に殻が残る心配がないのも大きな特徴である。対照区の被覆肥料と比較しても遜色のない結果となっていた。



続いて山形県尾花沢市へ移動して「スイカ」圃場を訪問し、肥実効試験区を視察。山形県はスイカの全国作付面積、熊本県・千葉県に次いで第3位。そして、その殆どが尾花沢市で生産されている。品種は「祭ばやし」と「富士光」でトモエ肥料の肥実効と同じエムシー・ファータイクム(株)社肥料であるハイグリーンを施用して増収・品質向上を図られている農場を訪問。試験区農場で収穫された2L玉スイカの試食も行われ、参加者一同美味しく甘いスイカに舌鼓を鳴らした。

最後に山形県村山市の基点温泉に移動して室内研修。良い土づくりの為の資材として「バイオフミン」の商品説明が行われた。未熟有機物による悪影響の事例を基に、ガス障害、窒素飢餓などを軽減する資材としての「バイオフミン」の効用を再認識した。また、今年より本格上市された緩効性窒素入り流し込み液肥「ロングリリーフ」の商品説明が行われた。商品コンセプトは、粒状肥料での追肥作業簡便化の要望のもと開発された流し込み液肥である。昨年のもとの栃木県での試験を事例に、高温でも安定した肥効を示し、対照区と比べて玄米品質や食味値でも遜色ない結果となっている。

研修会の後は懇親会にて東北各地区の様々な情報交換が行われた。紙面をお借りしまして、設営にご尽力賜りました山米商事(株)様に御礼申し上げます。(東京支店)

先週、沖縄・先島諸島を直撃し、大きな被害をもたらした台風は九州や本州にも影響を及ぼしました。被害に遭われました方々には心よりお見舞い申し上げます。この数日、突然の気温低下に体調を崩しやすくなっておりますので、体調には十分お気を付け下さい。

編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>